【590】

氏　　名　江村　公（えむら　きみ）
学位の種類　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人　博　第　251　号
学位授与の日付　平成16年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　ロシア・アヴァンギャルドの形成と発展
——再現表象から構成へ，そして表象へ——

論文調査委員　（主査）教授　池田浩士　教授　木村　崇　教授　岡田温司

論文内容の要旨

本論文は，20世紀の文学・芸術，さらには文化表現全般に大きな影響を及ぼした「ロシア・アヴァンギャルド」と総称される文化潮流のうち，とりわけ絵画および写真の分野における諸問題を，「再現表象」，「構成」，「表象」という表現上の特色に着目することによって歴史的に解明することを主題としている。

論文は3部9章から構成されているが，まず第1部では，「0－10最後の未来派展」，「第10回国立展・無対象的創造とスプレマチズム」，「5×5＝25展」の3つの展覧会に展示された諸作品の検討をつうじて，これらの展覧会がロシア・アヴァンギャルドの歴史にとってそれぞれ重要な転回点となったことを指摘し，その転回の意味を明らかにする。「0－10最後の未来派展」には，画家マレーヴィチの「黒い四角形」が展示された。論者はこの作品に即して，ロシア・アヴァンギャルドの一翼を担う「未来派」の初期において議論の的となっていた「ファクトゥーラ」の概念を再検討し，絵画の画面の「きめ」を意味するこの概念がロシア・アヴァンギャルドの表現総体にとって持つ重要性の解明を試みる。次いで「第10回国立展」に展示されたマレーヴィチの「白の上の白い四角形」とロトチェンコの「黒の上の黒」を比較考察することによって，絵画の表現上の原理である「構成」が「構成主義」という一つの「イズム」になっていく経緯を明らかにする。「5×5＝25展」からはロトチェンコの3原色のモノクローム絵画および彼の「線」表現への移行に着目し，ロシア・アヴァンギャルドの形成過程において顕在化しつつあった問題点の整理と再検討のための基礎作業をおこなっている。

第2部は，上記の基礎作業にもとづきながら，マレーヴィチの芸術理念である「スプレマチズム」（第4章），タラブーキンの綱領的著作『イーゼルから機械へ』（第5章）をそれぞれ詳細に検討し，構成主義とは別の道を歩んでいたマレーヴィチの芸術理念における「エコノミー」概念と，構成主義から生産主義へと移行したタラブーキンの「ウスタノフカ」の理念を考察することにより，機械技術や工場労働など芸術以外の，しかし芸術生産にとって無縁ではない諸契機との緊張関係と対決をアヴァンギャルドの芸術表現が避けることができなかった現実を，明らかにする。とりわけタラブーキンが構成主義の重要概念たる「事物」にかえて「ウスタノフカ」（元来は機械の設置，調整を意味する）を提起したことに関して生産主義の代表的な理論家，アルヴァートフが行なった批判は，アヴァンギャルドの芸術がソ連という国家の進路と無関係ではありえなくなることを示唆するものとしても重要である。

第3部では，ロトチェンコの絵画から写真への移行（第6章），「事実の文学」と称されたルポルタージュのジャンル（第7章），マレーヴィチの「無対象絵画」から「リアリズム」絵画への回帰（第8章）に焦点を当てながら，いわゆるスターリン時代への推移のなかでアヴァンギャルドの芸術がどのような展開と変貌を遂げたかを考察する。ロトチェンコの絵画から写真への移行は，言うまでもなく新しい表現媒体，しかも機械技術と芸術との結合への意欲を象徴するものであったが，それはまた同時に，「モンタージュ」という表現手法，および「ファクト」（事実）への関心と不可分であり，さらには絵画の場合とは別の新しい「ファクトゥーラ」の可能性を求める試みであった。そして，この意欲と試みが，1930年代の「白海－バルト海運河」建設という国家的事業への芸術家の動員にあたって，その成果を発揮することになるのである。

社会的現実とのラディカルな対決から出発したロシア・アヴァンギャルドは，こうして現象的には，現実を追認し美化する表現に従事するという一つの結末に至る。しかし，それはアヴァンギャルドの芸術そのものがスターリン主義的な要素をもともと含んでいたからである，というグロイスの見解に対して，本論文は基本的に反対の立場を取っている（第9章・結論にかえて）。形成から展開へ，そして30年代における終焉へ，という歴史的過程を，主として文学の分野を重視してきた先行研究とは異なり絵画・写真の領域を対象として再検討していることが本論文の特色であるが，アヴァンギャルドとスターリン主義との関係についても，絵画・写真における具体的な表現理念および作品そのものを考究することによって，具体的に何がどのように変わったのかを明らかにし，その変遷のなかに「全体主義」なる連続的要因ではないさまざまな断絶を発見し確認することが，本論文の目的である。

論文審査の結果の要旨

20世紀の文学・芸術，さらには文化一般に大きな影響を及ぼしたロシア・アヴァンギャルドに関しては，国内外に多くの先行研究がある。しかもそれらはきわめて多方面にわたっており，ここで新たな研究成果を提示することは著しく困難であるとさえ言わなければならない。こうした研究状況のなかにあって，本論文は，従来の研究が文学の領域に比重を置いてきたのに対し，絵画および写真の分野を取り上げ，しかも理論的成果についてだけでなく実作品にロシアで直接触れることによって，きわめて具体的に論を展開しながら，ロシア・アヴァンギャルドの形成と展開の過程に独自の考察と解釈を加えている点で，ユニークな研究成果たり得ていると言えよう。

本論文はまず，マレーヴィチの絵画作品を手がかりにしながら，絵画を構成する一要因である「ファクトゥーラ」の概念を考究する。画面の「きめ」を意味するこの概念は，言語芸術表現と絵画表現との芸術的可能性を区分する本質的な概念であり，それゆえにまたロシア・アヴァンギャルドの芸術家たちによって余りにも拡大解釈されていた。これを厳密に定義付ける本論文の試みは，代表的な芸術家のひとりロトチェンコが，絵画から写真へと表現領域を移していくことの根拠の解明にもつながる重要な作業である。さらに，「スプレマチズム」という芸術理念を立てたマレーヴィチが，芸術に「エコノミー」という概念を導入したこと，アヴァンギャルドたちのうちの「構成主義」にとって重要な概念である「事物」を，構成主義から「生産主義」へと移行したタラブーキンが「ウスタノフカ」（機械の設置，調整を意味する）によって置き換えたこと，それに対して同じ生産主義の代表的理論家であるアルヴァートフが批判したことなど，1910年代から20年代にかけてのロシア・アヴァンギャルドの展開と変貌の過程がヴィヴィッドに叙述され，それが30年代における変質の前段階および基盤であることが示唆されるのも，本論文の構成上の魅力の一つになっている。

本論文の独自の論点は，このような展開をとげたロシア・アヴァンギャルドが，機械技術や工場労働という芸術とは別の，しかし芸術表現にとって無縁ではない現実との緊張関係と対決のなかで，あるいは絵画から写真へ，あるいは「事実の文学」と称されたルポルタージュのジャンルへと移行し，ついには「白海－バルト海運河」建設という国家的事業への芸術家の動員に応じていくことになる過程を，具体的に描くことによって，ロシア・アヴァンギャルドには一貫してスターリニズムの「全体主義」と同質の要素があったとする論に反駁しているしているところにある。グロイスによって提唱されたこの「全体主義連続論」に対して，本論文は，大きな転回点であったと論者が考える1920年の『プラウダ』に掲載された一通の手紙に立ち戻り，プロレトクリト（プロレタリア文化運動）と未来主義に対するその批判を再検討し，それに対してロシア・アヴァンギャルドの歴史的推移・変貌の具体的分析を対置することにより，スターリン主義とのさまざまな断絶を明らかにしようとするのである。

一部を除き，先行研究も丹念に検討されており，論文全体の構成も緊張感に満ちたすぐれたものになっているが，本論文がとりわけ高い評価を与えられる点は，芸術理論および実作品を綿密に検討することによって，1920年代から30年代への移行過程の諸相を具体的に解明したことである。この両時期それぞれについての先行研究は少なくないが，何がどう変わったのかを明らかにするための過渡期の現実の追求は完全にはなされていないからである。本学位申請論文は，その時代の現場を生きた人間たちの姿を生き生きと彷彿させるという点ではなお改善の余地があるとはいえ，社会的現実との対決から出発したアヴァンギャルドたちがついには現実を追認し美化する表現にたずさわることになる一つの歴史を，それが内包した全体主義に必然的原因を見るという安易な結論に与することなく解明しようとする試みにおいて，ロシア・アヴァンギャルド

研究および現代芸術研究に新たな貢献をなすものである。また，文化・地域環境学に関わる独自の学際的研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻ヨーロッパ文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，2004年1月23日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。